

新潮社

池田みち子
生きる



生きる

池田みち子

新潮社

生きる

昭和五十七年八月十日 印刷
昭和五十七年八月十五日 発行

定価 一〇〇円

著者 池田みち子

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部 東京03三六二一五三

編集部 東京03三六二一五三
振替 東京四一八〇八番

印刷所 東洋印刷株式会社
製本所 大口製本株式会社

凡丁・落丁本は、御面倒ですが小
社通信係宛御送付下さい。送料小
社負担にてお取替えます。

生きる……目次

一章 偽名の人々

5

二章 過去の家族

67

三章 流れ着いた場所

120

四章 希 望

161

生
き
る

一章 偽名の人々

その晩もケイは眠れなかった。往来へ向いた鉄格子のはまった窓は開けたままだが、真夏の太陽に終日照りつけられたアスファルト道路を吹き抜ける風は生温い。それにひと晩中トラックが通った。その度に、簡易旅館玉井屋は地震のようにゆれた。

明け方になって、やっとうとうとして間もなく、帳場の窓をたたかれて「番頭さん、番頭さん」と呼ばれた。ケイは夢うつつに聞きながら返事をしなかった。こんな朝早く、ろくな用事ではない。窓はつづけてたたかれて

「小川さんが昨日入院されました。それで着かえをとりに来ました」

ケイはびっくりして起きると、窓のカーテンを開けた。廊下へむいて、縦横一メートルの窓があって、廊下の側に十五センチ幅の棚がついている。

白いワイシャツにネクタイをしめた四十年配の男が立っていた。眼鏡をかけている、どう見

ても山谷のドヤ者ではない。男の方でも、色の白い、ふくやかな顔立ちの五十がらみの女が顔を出したのが意外だったらしい。

「お休みのところをすみません」

とていねいに云ってから

「僕、河上です。出勤前に病院へ寄るつもりで早く来ました」

「耶蘇の人ですか」

「そうです、牧師です」

昨日は日曜だから、小川は教会へ行ったのだろう。昨夜小川が帰らなかったのをケイは気がつかなかった。ケイはいつも夕方から、宿泊人たちが帰ってくるのを帳場の窓から見張っていた。その日の宿泊代を受取らなければならないからだ。小川は生活保護で暮していて、保護費を受取った日に、一ヶ月ぶんの宿泊代を前払いした。生活保護で暮している老人はほかにもいるが、前払いするのは小川だけである。それで小川の帰りを気にならなかったのだ。

ケイは寝間着代りに着ている袖なしの簡単服のまま起きてきた。胸のボタンがはずれたままなので、右の鎖骨のすぐ下の入墨が見えた。極彩色の揚羽蝶である。羽根を七分に開いて、飛んでいるときの姿である。左の二の腕に、えぐったように深い火傷があった。火傷は横にのびて、時計のベルトのように腕に巻きついていた。ここにも蝶がいて、片方の羽根が火傷の中へ消えていた。火傷は入墨を消そうと試みて、失敗した跡である。牧師は入墨を見て驚いたよう

だが、ケイは気がつかなかった。ケイ自身が平気だから気にかけないのだ。

ケイは「こっちです」と先に立って、うす暗い廊下を案内した。

玉井屋には土壁がない、板壁ばかりである。山谷の二百軒に余るドヤの中で、今どき板壁は玉井屋だけだし、平屋建も玉井屋だけである。廊下は何処でも板敷で、履物のまま歩くのも玉井屋だけであった。

コの字の廊下の両側に、間口一間の個部屋が並んでいて、それぞれ三尺の板戸がついている。ドヤでは扉は使わない。扉は開けると場所をとるからだ。突当りに、つまりコの字の縦棒のところに、便所、洗面所、ガス台、風呂場が並んでいる。サル又ひとつの体格のいい老人が水道を開放しにして顔を洗っていた。老人はふりむいたが、河上牧師の顔をじろじろ見ただけで、会釈もしない。この老人は本城と云う。縦棒から左へ曲ったすぐの部屋の板戸に、表札の大きな白い紙を貼って、小川と書いてあった。ケイが頼まれて、書いた字である。板戸に名前を書き出しているのは小川だけである。小川には訪ねてくる将棋友達が多いからだ。

板戸に南京錠がぶらさがっていた。河上牧師は小川にことづかったのだらう、ズボンのポケットから鍵を出して南京錠をはずして、板戸をあけた。が、困惑したように廊下へ立ったまま入ろうとしない。部屋には窓がないので、うす暗くほら穴のようだ。眼が慣れると、入口の敷居にくっつけて蒲団が敷いてあるのが見えた。蒲団の片側に蜜柑箱を横にして二段に重ねたのが三つ並べておいてある。手前の蜜柑箱には、鍋、釜、七りん、茶碗など、自炊道具が詰めこ

まれている。隣りの蜜柑箱は衣類のようだ。いちばん向うの蜜柑箱は廊下からは見えない。枕元と、つき当りの壁の間に、古雑誌が積まれていた。兎に角、畳が見えないのだ。その上、正面の鴨居と入口の鴨居に綱を渡して、洗濯物が干してあった。

河上牧師は溜息を吐いた。小川は右足をひきずりながら歩いたが、細面で鼻が高く、品のよい顔立ちをしていた。垢のつかない身なりをしているので、こんなにひどい暮しをしているとは想像もしなかった。

牧師がためらっているのを見たケイは、蒲団を踏んで部屋に入って、綱にぶらさがっていたランニングシャツとサル又をはずした。それから「ほかにも着がえがあると思いますが」とひとり言のように云って、蜜柑箱の中の衣類をとり出した。汚れたままかびの生えたジャンパアや、つぎの当ったズボンが次々に出てきた。ケイは牧師をふりむいて「ほかにありませんねえ」と云い、廊下へ出ると「鍵をかけておかなくては」と牧師の手から南京錠を受取った。それから

「病院どこですか、近いなら、私も見舞いに行きます」

ケイは日頃、小川の世話になっていた。昼前に帳場のカーテンを開けると、夜の十二時、つまり門限まで、ケイは帳場を離れられない。日曜も祭日もなしにである。自分の買物をするほか、たまさかは気晴しに映画を見たり、浅草をぶらついたりしたくなる。こんなとき、いつも小川に留守番を頼んだ。小川はいつでも機嫌よく引受けてくれた。小川が屢々帳場に坐ってい

るので、ケイと夫婦に間違われたことが何度もある。

小川は玉井屋に十七年いる。ドヤ者は移動が激しいので、小川の十七年は奇跡であった。その次に旧いのがケイである。

ケイは玉井屋へ移ってきた頃、旧吉原の終夜営業の握り飯屋で働いていた。それで、夕暮れ出勤して、夜が明けてから帰ってきた。そのケイを、帳場の番頭に世話してくれたのが小川であった。

ケイの前にいた番頭は、玉井屋の名前で、あっちこちの電気屋から、あらゆる種類の電気製品を月賦で買った。一回払っただけで、全部売飛ばして行方をくらました。その前の番頭はドヤ代をごまかした。つまり、宿泊人のいる部屋を空いていることにして、ドヤ代を自分のふところに入れたのだ。始めのうち家主は気がつかなかった。すると、ごまかしがたが、だんだんひどくなって、ついに見つかった。そのもう一人前の番頭は喧嘩で人を刺傷して、逮捕された。いま府中刑務所にいる。

玉井屋は最初、家主の玉井夫婦が帳場にいた。東京オリンピックを二年後に控えて、山谷はオリンピック景気で湧きかえっていた頃である。地方の土方が、ぞくぞく山谷へ集ってきた。都内の、板前見習いとか、洋品店の店員とか、今まで土方をしたことのない若者たちまでが「山谷へ行けば×千円になる」と聞いて、土方に転業した。山谷のドヤは何処も満員で、金を持っても泊れない男たちがいた。それで、あっち、こっちで、ドヤの新築が始った。玉井

夫婦は銀行で金を借りて、南千住に第二玉井屋を新築した。地名は南千住だが、周囲にはドヤが多く、そのあたりもひっくるめて、山谷ドヤ街と呼ばれている。第二玉井屋は二階建の本建築で部屋数も多く、帳場は四畳半の奥にもう一つ四畳半があった。玉井夫婦は独り息子をつれて、第二玉井屋へ移って、旧い玉井屋の帳場は番頭にまかせたのだった。

銀行の借金もやっと返したとき、独り息子は中学生になっていた。山谷では子供の教育はできないので、東武線西新井の建売住宅を買って引越した。以来、玉井は、西新井から第二玉井屋へ出勤してきた。親戚筋だという、頭の働きのにぶい、だがおとなしい五十男が、第二玉井屋の帳場に泊っていて、掃除、洗濯などはその男がした。

玉井屋の番頭が次々にトラブルを起すようになったのは、玉井が西新井に引越してからである。山谷にいる時間が短いので、どうしても眼がとどかないのだ。ドヤの番頭は、宿泊人の中から探すのが普通だった。新聞に三行広告を出しても、職安へ頼んでも、ドヤの番頭を希望する男はいない。いたとしたら、おそらく使いものにならない男だろう。それに、土方で稼いでいる男たちは、土方の方が収入がいいので、番頭にはならない。玉井は小川に白羽の矢を立てた。小川は足が悪いし、齢もとっているが、まだ元気で、そのうえ人当りがいいから宿泊人と喧嘩をすることもないだろう。だが、小川は断った。番頭になると、生活保護を打切られるからだ。小川はケイを推薦して云った。

「一日も休まないで、真面目に働く女だよ、他所へ泊ったことも、男をつれこんだこともない

堅い女だよ、あの女、読み書きが出来るよ、学校を出とるんだろう。あの女なら番頭が勤まると思うよ」

と。小川はケイの入墨を知っていたが、玉井には云わなかった。入墨なぞ番頭の仕事と関係がない、と思ったからだ。ケイの部屋に運転手が泊りに来ていたのも知っていたが、それも云わなかった。女が男と寝るのは当り前で、ケイが売春している様子がないので、堅い女だとはめたのである。

ケイがあっさり番頭を引受けたのは入墨のせいである。握り飯屋でも、その前の小料理屋でも、いつでもケイは入墨をかくして働いた。和服を着た料理屋では、襷がけで店の掃除をするとき、女中たちは肩まで袖をまくりあげた。その中でケイは二の腕を見せないように絶えず気を配った。スタンド酒場にいた頃は、ケイ一人が夏でも袖の長いブラウスを着ていた。

山谷のドヤ者は互に他人のことはほっておいた。それに土方や鳶の間では入墨は珍しくないで、ケイは入墨を気にしないでいられた。山谷へ住んで山谷で働けば、入墨は忘れていられると思ったのだ。ケイが四十歳のときであった。

小川が入院したのは南千住駅から地下鉄で四つ目の駅のそばの立花病院であった。

「あの病院なら知っています、前に行ったことがあります」

とケイは河上牧師に云った。それから「仕度しますから待って下さい」と云って、白い長袖

ブラウスと水玉模様のスカートに着かえた。それで入墨がくれた。小川へのお見舞いに新しいタオルを一枚整理箆筒から出して、小川の下着と一緒に紙バッグへ入れた。

ケイは河上牧師と並んで、玉姫公園にそって歩いた。公園には墓塵を敷いただけの露店が並んでいて、ズボン、地下足袋、軍手、ボストンバッグなど、土方暮しに必要なものは何でも売っていた。ケイの水玉模様のスカートもこの朝市で買ったのだ。

河上は歩きながらケイに話した。

「小川さんはいい人ですね、悪い足をひきずりながら、日曜日毎に、朝早く来て教会の掃除をして下さいました。無償で奉仕して下さいたのです。私は勤めていますし、家内が身体をこわして田舎へ帰っておりますので、教会の掃除にまで手がまわりません。小川さんに救って貰いました」

ケイは胸の中で苦笑いをした。山谷の老人をあわれんでだろう、信者の中には、菓子とか果物とか鐘詰とかをくれる人がいた。小川は貰ってきたものは、自分で食べたり、ドヤの中で安く売ったりした。「ケイちゃん、ほんもののカステラだよ」と云って、手のひらにやっとなるような大きなカステラをくれたことがある。ケイは帳場をあずかっているのに、パチンコ屋で稼いできた羊かんを貰ったり、石けん一つ貰ったりすることがある。が、小川の贈物は飛抜けて上等だった。小川は何も貰わないときは「今日は獲物がねえよ」と冗談を云った。が、小川が誰からも好意を持たれる人柄なのは事実である。だからケイは小川に留守番を頼んだの

だ。

蓬萊中学の横を歩きながら、河上牧師がまた云った。

「小川さんは内ポケットに戸籍謄本を持っておられました。戸籍謄本によると、岡山の人で松崎啓一と申されます」

「戸籍謄本を持っていましたか」

ケイは瞬間足を止めて、強い語調で聞き返した。死んだら故郷へ帰るつもりだったのだ。いつ頃から戸籍謄本を持ち歩くようになったのだろうか？ 小川信三を本名だとばかり思っていた。それにしても他人の名前で生活保護が貰えたのだろうか？

ケイには戸籍がなかった。行方不明のまま死亡したものとみなされて、抹消されたのである。このことを知ったのは玉井屋へ来てからである。ケイは十九歳で終戦を迎えた。以来、異動申告も住民登録もない流転の生活をつづけてきた。ケイは泥にまみれた過去を人に話したことはない。年老いて人生の最後を山谷で送る小川にも人には話せない恥多い過去があるだろうのに、死んだら故郷へ帰りたいと考えたのだろうか。骨になってからなら、故郷で受入れて貰えると思うてだろうか。山谷では行き倒れを見るのは珍しくなかった。氏素性のわからない人たちは無縁墓に葬られた。ケイはいつの日か自分も無縁仏になる、と思っていた。無縁仏になる覚悟を決めたのは、戸籍が抹消されたのを知ってからである。

河上は言葉をつづけて

「偽名を使われたのには何か深い事情があったのでしよう、神様は何も彼も御存じで、お許し下さるでしょう、小川さんはいい人です、信仰心の厚い人です」

小川は信者だったのか、とケイは始めて知った。小川はものを貰いに教会へ行くとばかり思っていた。

二人は山谷通りへ出た。両側の歩道に、土方たちが立ったり、しゃがんだり、それが汨橋の方まで続いていた。土方たちは手配師を待っているのだ。どの顔もすがすがしい朝の表情に見えた。ケイは山谷に住みながら、早朝の山谷通りを見るのは十三年ぶりであった。旧吉原の終夜営業の握り飯屋で働いていた頃は、夜が明けてから玉井屋へ帰ってきたので、土方たちが集まっているのを毎朝見た。あの頃は景気がよかったから、玉井屋にも土方が大勢泊っていて、空部屋はなかった。

山谷を不況のどん底へたたきこんだのは昭和四十八年の石油^{オイル}ショックであった。建設業界の不況で、土方の仕事がなくなったのだ。玉井屋にいた土方たちも、山谷では仕事がないので、次々に地方の飯場へ流れて行った。現在、玉井屋にいるのは生活保護の老人が小川も入れて五人、後は、運送屋に勤めている男、ペンキ職人、水道工事人、東京港の荷揚人夫、清涼飲料水の外交員、露店商人等々で、土方は一人もいなかった。それで二十八室のうち三分の一は空いていた。玉井屋に土方がいなくなったので、早朝の山谷通りにもう土方は集まらないと思っていた。それがどうだろう、十三年前に変らず、大勢土方が集まっていた。何百人いるだろう？